高分子化学発刊40周年を 迎えて

桜田 一郎

「高分子論文集」は、「高分子化学」が10年ほど前に改名してつけられた名称である。それが今年発刊40周年を迎えることになった。高分子学会は、昨年30周年を祝ったのに、なぜ雑誌の方が年長なのか、それを簡単に説明するのが、この小論の目的である。

「ナイロンは石炭と空気と水から人工的につくられ、得られた糸は、鋼鉄よりも強く、くもの糸よりも細く、在来のどんな繊維よりも美しく……」と du Pont 社が宣伝を開始したのは1938年の10月であった。この新しい繊維ナイロンはわが国の輸出の大宗である絹に真向から挑戦するものとして、これを受けとめる政府、政界、社会、産業界のさわざは前例を見ないほど大きいものがあつた。

荒井溪吉君（当時富士紡社員、のちに高分子学会常務理事）が持ちこんだ試料でわれわれが試験した結果は、ナイロンは、評判どおりでなく、欠点もあるが、実力を持った繊維であつた。1939年2月16日に紡織雑誌社の主催で「ナイロンを中心とする合成繊維講演会」が開かれたが、この時ほど強い熱気を身にかけて行なつた講演は、その前にも後にもなかつた。この講演会から2ヶ月ほど後で「ナイロンの検討会」が行なわれ、その時に荒井溪吉君が、掲げた演題は「第三次繊維革命に直面す」と称する、いささかセンセショナルなものであつたが、今さらながらその優れた見通しに敬意を表するものである。

彼は単にアジッタばかりでなく、その見通しに基づき、巨大研究組織をつくることを計画し、まず産業界を説得し、ついで商工省（後の通産省）その他役所に働きかけ、彼一流の熱弁で、大臣の賛意も得、1941年には財団法人日本合成繊維研究協会の設立にこぎつけた。

この財団法人は、官庁・大学・企業も参加協力した

当時としては巨大な組織であつた。研究結果の報告を中心とした情報伝達のために「合成繊維研究」が発行された。その第1巻の大部分は研究協会がスタートする以前の研究を集めたものであり、大学、その他の研究所からの研究報告はもちろん、会社で行なわれた研究も数多く集録されている。2冊に分かれているが、合計870頁に及ぶ貴重な文献である。第2巻は昭和18年版と称し、1年が4冊にわかれて発行された。

戦争が深刻化するにつれ、この財団も単に合成繊維のみを研究対象とするのは、研究活動に不便・不適當であるというので、財団の名称を「高分子化学協会」と改め、会誌も「高分子化学」に変更した。その第1巻第1号が発行されたのは1944年の10月である。まもなく戦争も終つたが、協会の事務局長の奥田 平君らの努力によってこの雑誌の出版活動は続けられた。

1951年末、高分子化学協会の業務、財産などを引きついで、新しい社団法人高分子学会が誕生し、雑誌「高分子化学」は従前と同じように、現在も継続して発行されている。ただし、すでに述べたように、誌名は10年ほど前に変更された。

日本以外で、アメリカの Journal of Polymer Science は1946年1月に Elsevier Publishing Co. と Interscience Publishers から、またドイツの Makromolekulare Chemie は1947の9月に Verlag Karl Alber と Verlag Wepf & Co. からそれぞれ第1巻第1号が発行された。戦争終結をはさんで4年の間に、日、米、独3ヶ国で高分子化学の専門誌が発行されたことは、時代の必要に応じたものであろうが興味深い。また、「高分子化学」創刊後間もなく高分子友の会の会員が、800名に達していたことは、今日の日本における高分子研究者の層が、厚いことと関連していると思う。

Ichiro Sakurada (自宅 606 京都市左京区北白川東瀬ノ内町 49)

<略歴> 大正15年京都帝国大学工学部工業化学科卒。昭和10年京大教授、42年退官。京大名誉教授。同志社大教授。日本原子力研究所大阪研究所客員研究員、所長を併任。